

記念碑のポリティックス——戦争・喪・共同体

1. 「喪の作業」概念の射程

☆フロイト「喪とメランコリー」(1915年)。

*「喪の作業」：愛する対象を喪失した結果、精神のうちに起こるプロセス。

(1) 個人にとっての喪：

・死者を想起し、想起の反復により「死者の死」を経由しつつ、主体がみずからの本来的な生に立ち戻る円環的な行程：

対象喪失→外部世界に対する現実的関心の低下。対象に備給していたリビドーは方向を失う。

→「現実検討によって、愛する対象がもはや存在しないことを知り、その「全リビドーが対象との結びつきから離れることを余儀なくされる」。

＝死者に本当の死を与え、生者に生を与え返す、ゆるやかで相互的な作業。

・「メランコリー」：自我が「極度の貧困化」に陥る。失われた対象に自我が同一化。

対象の喪失が自我そのものの喪失に転換。

→リビドーは新たな備給対象を見出さないまま、「対象の亡霊」としての自我へ際限なく向かう。

(2) 集団にとっての喪：

☆A.&M.ミッチャーリッヒ夫妻『喪われた悲哀——ファシズムの精神構造』(1967年)。

*旧西ドイツの戦後の驚異的な経済発展を可能にした集団心理を分析。

→「国家の一大破局の後での喪の反応の欠落」：二重の巨大な「喪の作業」の必要。

(a) ナチズムの殺戮の対象となった大量の死：ユダヤ人、ロマ、同性愛者、精神障害者。

(b) ナチズム政権下における主体の喪失：国民が「共通に分け持った自我の理想」、集団的同一化の中心であったヒトラー＝「総統」の死。

→理想化され絶対化された中心的価値の崩壊、無限の「罪障感」と「恥辱」：

「メランコリー反応」の可能性。

→連邦共和国の集団心理：「心的装置にとっての緊急の課題」としてみずからの「自我」を「貧困化」から徹底して「防衛」。

「第三帝国への昂揚と総統とその教義の理想化、直接的な犯罪行為などに関わる過去一切からの、エネルギー備給の撤回」。

→「経済システム」への備給・同一化＝「喪の作業」の忘却による共同体の救済と再構築。

2. 死者・記憶・ナショナリズム

☆死（者たち）を媒介として形成されるナショナリズムの過去と現在。

Ex. 「9・11事件」直後の合衆国：「祈りと追悼の日」(2001年9月14日)。

ブッシュ大統領：「…そしていまわれわれの手元には名前がある。戦死者たちの名前が。／やがてわれわれは、これらすべての名前を詠むことになるだろう。…そして、多くのアメリカ人は、彼らに涙することとなるだろう〔…〕。そしてわれわれは、犠牲的行動の中に、わが国家の性格を見出す。〔…〕これらの行動、そして、その他の人々のさまざまな行動によって、アメリカ人たちは、お互いを結ぶ深い絆の存在と、わが国家に対する永続的な愛の存在を示したのである。／今日われわれは、フランクリン・ルーズヴェルトの言うところの〈国家的団結の温かい勇気〉を直に感じることができる。…われわれの団結は、悲嘆によって結びつけられたものであり、敵に打ち勝つという固い決意を示すものである／主よ、死者たちの魂を祝福し給え。われわれの魂を癒し給え。そしてわれわれの国家を導き給え。」

☆フロイト「集団心理学と自我の分析」(1921年)：

・「私は、1912年に、Ch.ダーウィンの推測にならって、人間社会の原始形式は、一人の強い男性によって無制限に支配される群族であると考えた。そして、この群族の運命は、人間の世襲の歴史の中にそのまま痕跡をのこしていること、とくに宗教、道徳、社会組織の端緒をふくんでいるトーテミズムの発展は、首領の暴力的な殺害と、父長制の群族から同胞の共同体への変形とに
関連していることを、私は明らかにしようとした」。

・「トーテムとタブー」(1912-1913年)：「トーテム饗宴の祝祭を引き合いに出すことが、われわれに解答を与えてくれる。ある日のこと、追放された兄弟たちが力をあわせ、父親を殺してその肉を食べてしまい、こうして父群にピリオドを打つにいたった。彼らは、団結することによって、一人ひとりではどうしても不可能であったことをあえてすることになり、ついにこれを実現してしまう。[...] 暴力的な父は、兄弟の誰にとっても羨望と恐怖をとまなう模範であった。そこで、彼らは食ってしまうという行為によって、父との一体化をなしとげたのである。おそらく人類最初の祭事であるトーテム饗宴は、この記念すべき犯罪行為の反復であり、記念祭なのであろう。そして、この犯罪行為から、社会組織、道徳的制約、宗教など多くのものが始まったのである」。

*共同体の起源に位置する「死せる父」。

*死んだ「父」の場所を遡及的に構成し続け、その共同体のために死んだ者たちを送り込み、隠喩的連鎖を確立することで、みずからの歴史＝物語を構築すること。

☆ジョージ・モッセ「死の国民化」(『英霊』)。

・第一次世界大戦以後、諸近代国民国家で行われる。

フランス：凱旋門に無名戦士の棺(1919年)、イギリス：「戦没者記念碑」(1920年)

ドイツ：「ノイエ・ヴァッヘ」(1931年) etc.

*死者を取り込み、その記憶を共有することで「国民」という共同表象を形成する政治。

3. 内面化なき喪、物質化する喪

☆J.デリダ：想起＝内化の外での喪の作業。

・「しかし、諸集合の単純で「客観的」な論理を挑発するもの、全体への一部分の単純な包含を攪乱するもの、それこそは、内面化する記憶(Erinnerung)の彼方で想起されるもの、記憶(Gedächtnis)へと想起され、「全体」よりも大きな「部分」として思考されるものである。すなわち、それこそは他者としての他者、非一全体化可能で、それ自身へも同一者へも適合しない痕跡である。この痕跡は、もはや内面化され得ないものとして、不可能な Erinnerung として、喪において内面化される——喪に服した記憶の内部かつ彼方で、その記憶を構成しつつ、その記憶を横断しつつ、もはやそこにみずからを限定することなく、あらゆる再自己固有化を挑発しつつ」。

⇒☆ダニエル・リベスキンド『ベルリン・ユダヤ博物館』(1999年)。

・「歴史の絶対的出来事」(ブランショ)としてのホロコースト以後の時間の問題化。

・必然的な時間攪乱性。

・「空虚 Voids」：喪われた時間を空間化する場所なき場所。

＝想起を限界へともたらし、内面化された死者たちを外へ晒し出す非一人間的な装置。

・建築における「徹底操作」(フロイト)。